◆高千穂宮四か所の所在地

南九州では、「高千穂宮は、どこか」について、宮崎県高千穂町、鹿児島県川内市、鹿児島県霧島市、宮崎市の関係者の間で、長い間、論争が繰り広げられてきたが、未だ解決していない。遠く離れた地域から見ると、高千穂宮は日向北部の高千穂郷に決まっているではないかと思われがちだが、さにあらず。

そもそも、「高千穂宮はどこか」を争点にして、答えを一つに絞ろうとするのが、間違いなのだ。これは、「高千穂宮は、どう移り変わったのか」という観点から議論すると、容易に決着することだ。

実は、熊襲に降臨した火瓊瓊杵も、その跡継の火火出見も、そのまた子のウ草葺不合や磐余彦も、自身が開いたり住んだりした都を高千穂宮と呼んできた。それは、日神の政を再現してみせる決意表明でもあった。結果からいうと、高千穂宮は日神が天宮とした高千穂郷に始まり、火瓊瓊杵が高千穂峰の麓に仮宮した高原町、火火出見が都した都城市都島と霧島市隼人町、そして磐余彦が東征に旅立った宮崎市神宮へと移った。五代にわたり、計四か所以上が存在したのである。

その中で、高千穂宮に座した日神だけが天上で暮らすごとくに、時には光輝く太陽のごとく記されてきたのは、日神が天上と地上を支配する天之国の日天神とされたからだ。

「記紀」から当時の世情に思いを馳せると、こうした表現は、日神が天之国の天宮（天上の都）に座して天地に君臨したとする考えに沿っていて、何らおかしくはないし、不可解でもない。

例によって、高千穂宮について古い順から列挙すると、こうなる。ちなみに、火瓊瓊杵が都した笠沙宮も二か所あった。

国主	都の名	所在地	期間
日神の天照大御神	高千穂宮①	宮崎県高千穂町	１８０年代後半～２２０年代前半
火瓊瓊杵	高千穂宮	宮崎県高原町	２２０年代前半、降臨途上の仮宮
	笠沙宮	鹿児島県加世田市	２２０年代前半
	笠沙宮／西都	宮崎県西都市	２２０年代前半～２４０年代後半
	高城宮？	鹿児島県川内市	２４０年代後半～２５０年代前半
火火出見	高千穂宮②	宮崎県都城市	２５０年代前半～２７０年頃
	高千穂宮③	鹿児島県霧島市	２７０年代頃～２８３年頃
磐余彦	高千穂宮④	宮崎市	２８３年頃～

【宮の宇都（みやうと）】（宮崎県高原町）、降臨した火瓊瓊杵が高千穂峰麓のこの地に**高千穂宮**を設けたと伝わる。狭野（高原町）で生まれた磐余彦ら四兄弟は、ここで父のウ草葺不合と共に暮らしたという。近くの都城市都島は火火出見の**高千穂宮**があった処。この一帯は、霧島連峰の噴火によって、神社の鎮座地が移り変わり、多くの伝承も消え去った。

『古事記』、「穂穂手見命は、**高千穂宮**に五百八十歳座しき。御陵は高千穂の山の西にあり」

【鹿児島神宮】（霧島市）、祭神は、穂穂出見と豊玉姫。社伝によると神武天皇の御世に、穂穂出見の宮殿があった**高千穂宮**跡で祭祀が始まったと伝わる。

「神武記」、「神倭伊波礼毘古命、その同母兄五瀬命と二柱、**高千穂宮**に坐（ま）しまして議（はか）りて云りたまいけらく、『何地に坐さば、平らけく天の下の政を聞こしめさむ。なお東に行かむ。』と」

【宮崎神宮】（宮崎市）、神武天皇が**高千穂宮**をおいた所とされる。その孫の建磐竜が筑紫の鎮守となった時に、神武天皇を祀ったことに始まるという。